「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界遺産登録推進フォーラム

平成２８年１１月２０日（日）、旭川市大雪クリスタルホールで、札幌国際大学縄文世界遺産研究室の越田先生をお迎えして貴重なご講演をいただきました。
ここでは、その内容を一部抜粋してご紹介いたします。

テーマ「縄文遺跡群の世界遺産登録へ向けて−地域と文化財の視点から−」【抜粋】

1　旧石器文化から縄文文化へ

日本の森林面積は、国土の70%を超えており、世界の先進国でも群を抜いています。しかし、旧石器時代には森林はもっと縮小しており、縄文時代になって現在の様な森林が広がるようになりました。では、旧石器時代から縄文時代にかけてどのような自然の変化が起こったのでしょうか。そして、人類はどのようにそれに対応してきたのでしょうか？

このことを明らかにすることが、現在の日本を考える上でも大事なことになると思っています。

旧石器時代は氷河期といわれる寒冷期にあたり、今から２万年から１万８千年前が最も寒い環境でした。極地や高い山には氷山や氷河ができ、地上の水は氷として閉じ込められます。そのため、海水面が低下し、陸地が広がっていました。北海道は、サハリン、大陸と地続きになり（陸橋）、南方では東シナ海が陸化し、対馬海峡も狭くなっていました。

大陸の北方からは、マンモスなど寒冷地の動物群とそれを追った人類が陸橋を渡って北海道に入ってきました。また、南からも温暖な土地の動物群とそれを追った人々が日本列島に入ってきました。この時期、北海道はツンドラ気候となり、本州方面には針葉樹林帯が南方まで広がって、今私たちが札幌周辺で見ることのできる落葉広葉樹林帯は、西日本の一部と東日本の谷あいにだけ見られる状況になっていました。

話は飛びますが、現在、下北半島に生息しているニホンザルが北限のニホンザルとして天然記念物になっています。下北半島にサルがいるのは、氷河期に南方に押し込められた落葉広葉樹林帯の中で、かろうじて生き残る事が出来たからなのです。旧石器時代から縄文時代にかけて、徐々に気候が温暖化していきます。温暖化に伴う落葉広葉樹林帯の拡大と北上に伴い、サルが本州北部にまで棲息地を広げるようになったのです。

ところが、サルたちは津軽海峡に妨げられて、北海道までわたることはできませんでした。霊長類のなかで、津軽海峡を越えて往来したのは人類だけだったのです。津軽海峡をはさんだ地域に人類は北の縄文文化を作り上げ、そして今、津軽海峡をはさんで広がった縄文文化を世界遺産に登録しようとする動きが起きているのです。

2　津軽海峡圏の縄文文化の生活

津軽海峡をはさんだ文化圏の特徴を、海、森、雪の三つのキーワードでとらえてみたいと思います。

（1）　海

最も寒かった旧石器時代の１万８千年前頃から気候が温暖化して、縄文時代の6000年前頃に最も暖かくなります。その後寒冷化して4000年前ころにはほぼ今の気候になったと考えられています。
気候が温暖化してくると、氷山や氷河が融けて、海水面が上昇します。北海道は大陸から切り離され、朝鮮半島と九州の間も広がって、現在の日本列島に近い形になります。

暖流（対馬海流）が日本海に流れ込み、冬に日本海側の地域に多くの雪を降らせるようになりました。雪はゆっくり溶けて、森を育み、さらに、海に流れ込んで豊かな入江を造りだしました。そこに、魚が産卵に来て、貝が生息するようになります。その周りに人々が集まり、集落を営み、貝塚を形成します。

貝塚からは、食べた貝殻や魚の骨だけでなく、森の動物の骨や使った道具類も出土していますし、人の墓が造られることもあります。

単なるゴミ捨て場ではなく、自然への感謝の場であったと思われます。

（2）　森

温暖化によって、森の様子も変化します。本州の南方まで押し下げられていた落葉広葉樹林帯は徐々に北上して、9000年前ころには北海道の南西部に広がるようになりました。

それまでのツンドラ地帯や針葉樹林帯では、それほど多くの木の実はとれませんでした。それが、落葉広葉樹林帯になると、秋にクルミ、ドングリ、クリなど大量の実が落ちるようになります。

また、冬に葉を落とすので、太陽の光が根元まで射し込み、春先にはたくさんの山菜が芽生えるようになりました。これらの植物を利用するためには、灰汁をぬかなければいけません。

そのためのお湯を沸かす道具として、「土器」が生まれたのです。

また、落葉広葉樹林帯が北上してくると、そこに棲息する動物たちも変わってきます。マンモスなど寒冷地に住んだ大形の動物たちは、北へ移動していくか、絶滅してしまい、森にはシカ、ウサギ、リス、キツネなど中小形の動物たちが多くなります。大形の動物は、大きなヤリを使って狩猟できたのですが、森の中のすばしっこい動物をとらえるために、弓矢が発明されました。

弓矢では遠く離れた所から獲物を狙うことができ、狩猟の成功率も上がったと思われます。

（3）　雪

大量に降るようになった雪が人々の生活に変化をもたらします。冬に雪に覆われた大地を歩き回って食糧を探すことがほとんどできなくなります。

冬ごもりのために、保存食を貯え、暖かい住居を作って、暖かい衣服を用意しなければなりません。これに対応する生活形態が、北の縄文文化の特色を生みだしていきました。森を流れる川にさかのぼってくる、大量のサケやマスを乾燥させて貯える。森でとれる大量のドングリ、山菜、球根類を灰汁抜きして保存する。海でとれる貝や小型の魚を干し、あるいは煮干しにする。土器の利用がこのような保存食作りに役立ったわけです。衣類は、寒さに耐えるための毛皮類と、夏の湿った暑さに対応する樹皮衣が使われたと思われます。服を作るためには糸と針が必要です。木や草の繊維を撚って糸とし、骨の針を使って、毛皮や樹皮を縫い合わせます。糸を太くすると紐になり、縄になります。

縄を使って木を組み合わせて暖かい住居を作るようになりました。

糸や縄は、二つ以上のものを組み合わせ、創造していくために役立つのです。

この縄を使った文様が、土器に付けられているのです。

（4） 土器の利用と生活の変化

北海道では、1万3000年前の古い土器が見つかっています。土器を使用することは、現在の鍋を使うことと同じで、「煮る」ことが出来るようになったことを意味します。

植物食や魚介類への利用だけでなく、肉の調理にも使われます。焼いても食べられなかった堅い部分は、スープにすることによって、栄養価を逃さず食べることができるようになりました。幼児の離乳食や老人食としても利用されたでしょう。食の幅が広がり、生活が安定してくると、動物を追って動き回る必要がなくなり、定住生活が始まりました。竪穴住居を作って、一年を通して同じ場所で生活するようになると、乳幼児死亡率が減り、老人も長生きできるようになり、人口が増加していったと考えられます。

村が次第に大きくなり、長期間維持されるようになりました。同じ場所に生活していますと、周辺の村と緊張関係が生じることも有ります。また村の中でも、いろいろな廃棄物がたまりますし、ストレスがたまることもあったでしょう。縄文人はそれを交易と集団作業と祭りで解消していきます。

集団作業の結果が、環状列石、周堤墓、盛土などの大形記念物として残されているのです。

このようにして、北の縄文人たちは、農耕文化（弥生文化）の出現以前に、安定した社会を一万年もの長い間維持させていきました。

3 三内丸山遺跡がもたらしたもの

北の縄文文化遺跡群が世界遺産登録をめざすきっかけになったのが、青森県三内丸山遺跡の発掘調査でした。1990年代はじめに、野球場を作ることになり、発掘調査が開始されました。発掘をはじめると、「多い、大きい、長い」で表現される貴重な発見が相次ぎました。数百件の大型集落、大形の住居跡、二つの盛土遺構から出てくる大量の遺物などとともに、大勢の人を驚かせたのが、直径1メートルを超す太いクリの木で作られた6本柱の建物跡でした。それに、集落が千年にもわたって継続されていたことが明らかになったのです。

また、広範囲に交易がおこなわれ、津軽海峡を越えた北海道の黒曜石、秋田・新潟のアスファルト、姫川のヒスイ、長野の黒曜石などが各地から持ち込まれていました。これらの発見により、自然の中でぎりぎり生き伸びている縄文人のイメージが大きく変わり、縄文文化の豊かさが強調されるようになりました。そして、津軽海峡をはさんで北海道と東北北部に、「津軽海峡文化圏」といえる結びつきがあることが明確になってきたのです。

もう一つ、大きな出来事がありました。北の縄文遺跡に大勢の観光客が訪れてきたことです。

関西では遺跡の見学者が一日一万人以上になることもよくありましたが、東北の遺跡に全国から見学者が集まったのは初めてのことでした。地元も盛り上がり、遺跡の保存が決まって工事が中止され、特別史跡に指定されたのです。6本柱の建築物や大形住居跡などが復元され、盛土遺構のトレンチ断面などの展示施設ができました。地元の人たちが、体験学習の手伝いをしたり、自分で製作した縄文グッズを持ち寄って販売したり、おおいに地域が盛り上がったのです。

「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録への原動力になった出来事だったのです。

4 縄文土器がもたらしたもの

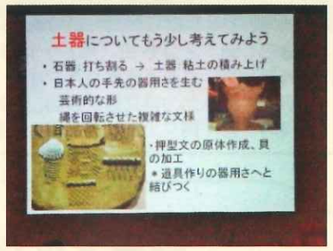
土器が作られることによって、食生活の幅が広がり、定住生活が始まるとお話しました。

ここでは縄文土器が、現代につながる要素を持っていることをお伝えしようと思います。

旧石器時代の石器は、石を打ち割って作るので、石より大きなものはできません。一方、土器つくりは、粘土を積み上げて作りますので、大きなものを作ることができます。

また、大きな突起など、自由な形も作れます。さらに、これに文様を付ける作業が加わります。

世界的にみても、土器の鍋に大きな突起を付けたり、精緻な模様を付けることはほとんど知られていません。このような縄文土器のもつ芸術性は、世界的にも認められているのです。



文様を付ける時に、撚り合わされた縄や模様を刻んだ原体を回転させています。縄を撚り合わせる、原体を刻むことは、日本人の手先の器用さの原点になります。

縄文土器の縄による模様は何を意味しているのでしょう。

回転文ですから、丸くした粘土の上に終わりなく文様を付け続けることができます。いわば、永遠につながるエンドレス・コードなのです。縄は糸を太くしたものです。

糸は毛皮や樹皮を縫い合わせるもの、縄は木を組み合わせるものとお話ししました。

縄は、様々な創造の力を持つものではなかったのでしょうか。

また、縄文鍋は、世界無形遺産に登録された、「和食」の鍋の原型になると考えています。土器に肉、魚、山菜など地域の産物、季節のめぐみを入れて煮ていました。これに弥生時代以降に入った醤油や味噌で味付けすれば、和食の鍋になるのです。雪の深い地域にいろいろな鍋が残されているのは、縄文時代以来、冬越しの食としての役割を持っていたからなのでしょう。

5 縄文遺跡群の未来への継承

縄文文化に弥生文化が加わり、大陸の文化、さらに、西洋の文化が混ざり合って現代の文化を形成しています。人々は、その時々に自然に働き掛け、生活を維持してきました。

その生活の証拠が文化財として残っているのです。

自然は常に我々に微笑みかけるだけではありません。

地震、雷、津波、噴火、大雪など様々な災害をもたらします。

人類は、その危機を最小限に抑える努力してきました。

常に耐えることを知る文化だったのです。

縄文文化が長く続いたことが、日本人の粘り強さを生みだしていたのではないでしょうか。

東日本大震災の時、熊本地震の時、各地の文化財や伝統的行事が復興のシンボルとなりました。

これから震災を乗り越えて新たな未来への文化財を築いていくときに、日本文化の源流ともいえる縄文遺跡群を世界遺産登録することは、大きな価値があると私は考えております。（終）